

旅を振り返って

私のモラトリウムは、こうして終わった。

普通の進路から外れ、試してみても、ヨーロッパで働いてみるといった能力や志も十分には持ち合わせていなかった。そして、働いて収入を得て、社会の一員となる気持ちも固まった。その前にやりたいことが何とかがやれたのである。

今思えば、当時の日本は、高度成長期を迎え、きちんとした進路に乗り社会に出て、そこで活躍することが当然という風潮であったと思われる。自由度が低い社会システムと私には映っていた。しかし、ビートルズやボブ・ディランの少々反体制的かつ自由に生き生きとした雰囲気の影響を受けていた私、そしていくつかの文学作品から普通の進路ではない経験の影響を受けていた私には、望ましいと思われる進路に乗りながらの生き方は息苦しくかつ怖いと感じていたのだ。

そんな私が、この旅を終えた後では、怖いと感じながらも自分を保ちながら、日本での社会生活に挑戦していく気持ちも固まってきた。

帰国後、再び、実家に身を寄せて就職の道を探った。地方公務員の試験を受けたが、あっけなく不合格となった。実家で近くの海や汽水の沼で釣りなどをしながら時を過ごした。

具体的な就職先が見つけれられない中、大学の恩師であるT教授から電話を頂いた。福岡市内の建設コンサルタント会社に受験してみないかとのことであった。なるべく福岡市で就職したいと思っていたので喜んだ。試験は面接のみであった。過激派の学生かどうかを心配されたようだ。体制寄りではなかったが（昔の大学生はほとんどそうだったと思う）過激な思想もなく行動もしていなかったため、入社させていただいた。T先生にはまたしても助けていただいた。感謝しても感謝しきれない。

一九七五（昭和五十）年の一〇月一日より入社し、会社人生を送ることとなった。就職後、しばらくしてから絵がきを

送っていた女友だち（現在の妻）と結婚した。

この旅行は何だったのか？

一つは、不安だった会社人生などの進路へ挑戦するといった気持ちを固めさせてくれた。

二つ目は、普通のコースからわずかな期間だが外れ、自分なりの考えを実行できたので自分にすこしばかり納得することができた。

三つ目は、トラブルの折などには、直観力や判断力をフルに働かせる必要があったが、何とか凌ぐことができたので自分に自信ができた。

四つ目は、映画、小説、随想などの外国のシーンや外国で起きている事件などが、身近に感じられるようになった。そして、ふとした時にこの旅のシーンやその時の気持ち、時にはにおいみたいなものが思い出され、そんな時は心持が少しだけだが豊かになれるようになった。

五つ目は、日本にきている留学生などの外国人に接しやすくなった。そのおかげでわずかだが友達もできた。

六つ目は、私のこの旅行が、弟や息子に影響を与えたか、彼らも一人で海外を回った。息子は、私よりかなり冒険的な旅をした。

七つ目は、飲み会の場などで、若い人と話す時、貴重な経験を自慢話として披露できるようになっていた。これは嫌がられた時もあったであろう。

とにかく、大きな事故・事件にも合わず、また体調も崩さず、無事、帰国できたことは幸いであった。冷戦時代ではあったが、日本赤軍を除けば国際テロは今ののように活発ではなく、パンデミックという言葉も知らず、地球温暖化とそれが引き起こしている様々な問題も認識されていなかった。今思えば、少しぜいたくかつ幸運な旅行であったと言えるかも知れない。

亡き父や母には心配を掛けたであろうが、あたたかく見守ってくれた。当時は、父母の心境などはまったく考えていなかったが、今は子供や孫を持つて少しは想像できる。

父母の他、エールをくれた友達、東京での宿を提供し横浜港まで見送ってくれたK叔父、旅先で親交を交わした方々、私を旅に誘った文学作品の数々やビートルズ、私の自慢話を聞いてくれた方々、今ネットなどで有用な情報を提供しておられる方々、この旅行記が楽しみとお世辞でも言ってくれた同世代の友人達、そしてこの原稿にアドバイスをくれた二人の弟、最後に、私からの絵はがきをきちんと取っておいてくれた妻に感謝したい。

もう一度、この言葉を引用したい——ともかく全力疾走、そしてジャンプだ。錘のような恐怖心から逃れて！

(大江健三郎の『日常生活の冒険より』)

令和五年十二月 木寺 佐和記